

田辺尚雄の雅楽概念～民族の音楽起源としての雅楽～

鈴木聖子 SUZUKI, Seiko(東京大学大学院人文社会系研究科)

田辺尚雄(1883～1984)は、日本音楽史研究の基礎を築いた人物としてよく知られている。彼の名を大きく世に送り出した『日本音楽講話』(1919年)と、それに続く一連の研究活動の特徴は、日本音楽の起源と歴史とを以ってその民族性を語る点にある。本発表は、田辺が日本音楽の起源を設定する際に創出した雅楽概念に着目することで、大正期から昭和初期の日本音楽史研究における民族主義的文化表象のひとつを明らかにする試みである。

田辺によれば、従来の日本音楽史研究には「音楽科学」が不足していた。そのため、西洋音楽と比較しうる音楽理論を有する外来系歌舞、つまり狭義の「雅楽」が、まずは彼の好んで扱う対象となった。ところが一方で、彼が雅楽の継承において正統性を認める宮中の「雅楽」には、「日本固有の」神楽が含まれていた。ダーウィニズム的史観にあった田辺にとって、しかし神代をも含む上古の歌舞音楽は「未開的」なものでしかなく、平安期に発展を遂げた大陸由来の「芸術的」「科学的」なそれとは厳格に区別されて然るべきものであった。

かかる「固有」と「発展」の撞着語法を引き受け、「音楽科学」による民族の物語を再構築しようとしたところに、田辺の雅楽概念の創出は始まる。これが、1:神楽など「日本固有の」歌舞、2:唐楽・高麗楽などの外来楽、3:催馬楽・朗詠などの新作歌曲、の三分類からなる表現形態で描かれる、現在の「雅楽」の誕生の瞬間である。この表現法の卓越した点は、固有性をもった各種目の分類表であると同時に、発達順の年表として機能するところである。すなわち、1から3へと時間軸に沿ったひとつの塊として、「固有」にして「発達」した切り離せない「雅楽」を表象しているのである。また田辺は、時を同じくして正倉院収蔵楽器の「調査」「測定」を行っているが、そこでは「雅楽」以前の楽器の起源が、古代オリエントへと訪ねられていく。以上のような手続きを踏むことにより、世界における日本音楽の優越性が成就するのであった。

田辺における民族の音楽起源の探求は、同時期の西洋の比較音楽学(後の民族音楽学)が、自文化の音楽起源を非合理性としての「未開」(=「東洋」)に要請した「オリエンタリズム」と比較すると、日本の音楽はそうした「未開」を含みつつもそれと同列にあるものではないと表現するための、いわば返し技としての「オリエンタリズム」の行使であることを本発表は明らかにした。このことは、ひとり日本音楽史研究の領域のみならず、グローバル化によって排他的な民族主義の傾向が強まる現代社会において、自文化であれ異文化であれ表象することの困難を再考させる点で、現在性を有する問題を提起したと考える。